ドラゴンクエスト～勇者達の物語～

スイショウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドラゴンクエスト～勇者達の物語～

【Ｎコード】
Ｎ８６６４Ｙ

【作者名】
スイショウ

【あらすじ】
依頼を終えて暇を持て余していた冒険者アウダー。彼の元に勇者を名乗る一行からとある依頼が舞い込んだ。怪物島と呼ばれるデルムリン島への案内を頼みたいというものだ。軽い気持ちで引き受けたこの依頼がアウダーの、彼の周囲の運命を大きく変えて行く。

プロローグ～始まりの物語～（前書き）

この物語は「ドラゴンクエスト　ダイの大冒険」を原案として、作者のオリジナルキャラクター、独自解釈を加えて再構成しています。

そのため、ストーリー展開は原作に沿った部分もあれば、大幅に変化する部分もあります。

このために、「原作登場人物」の中には、設定・役回りが大幅に変化して登場するキャラクターもおります。

誤字脱字などありましたら、遠慮なくご指摘いただけると幸いです。

ご意見、ご感想もお待ちしております。

プロローグ～始まりの物語～

天界、魔界、そして地上界――
天地創造をなした神々は、次いで多くの種族を世界へと産み落とす。
人間、竜、魔族、そして多種多様な怪物（モンスター）達。
人間と竜と魔族は地上を治め、怪物達は種に応じてあらゆる場所で生息をしていた。
神々の庇護の元、大きな争いも無く平和に治められていた世界。
しかし、長きにわたる平和も徐々に陰りを見せ始める。

生物として、他の種族とは比較にならない力と知識を持った竜の傲慢。
多種多様な能力と長い寿命、強大な魔力という力を持った魔族の野心。
最も脆弱であるが故に、知恵を、道具を、武具を、魔法を用い、求める事を続けてきた人間。

長い時は、この三種族の間に生まれた僅かな軋みを巨大な歪みへと変化させ――やがて地上は三種族の覇権をめぐる争いの中に。

「……それで、世界はどうなったの？」

「この争いを怒り悲しんだ神様にですね、竜は知を、魔族は光を、人間はそれまで蓄えていたモノ全てを取り上げられてしまったんですよ」

怖いですねぇ。そう続けながら、男は幼い兄妹の目線に合わせるようにしゃがみ込んだ。
黒縁の眼鏡を外し、幼子を見つめる彼の眼差しは穏やかである。
泣き止みはしたものの、未だぐずついている少女と、どこかばつの悪そうな様子でそっぽを向いている少年。
少女の左手は少年の服の裾を掴み、その右手にはリンゴが一つ。
兄を見て、リンゴを見て。そうして少女はおずおずと手にしたリンゴを男へと差し出した。

「お互いがお互いを思いやり、分かち合い、理解し合おうとしていれば。きっと素敵な世界になっていたんでしょうねぇ」

男は懐からナイフを取り出すと、少女の手から渡されたそのリンゴを軽く放り上げ――

「ちょあぁあぁっ！」

奇声を上げた。
突如上がったその声に何事かと兄妹の気が逸れた一瞬の出来事であった。

「二人とも、手を出して下さい」

差し出された兄妹の掌にトトトッ、と何かが落ちて来る。それは綺麗に三つずつ六等分に切り揃えられたリンゴであった。
ただ等分しただけではなく、皮を耳に見立てたウサギ仕様である。男の技量と妙な凝り様がうかがえる。

「三つと三つ、半分個です」

わあっと表情をほころばせながら去って行く兄妹を、男は手を振り笑顔で見送った。
眼鏡を掛け直し、良い仕事をしましたねぇ、と内心浸りながらしばらくそうやって眺めていると

「先生〜、アバンせんせ〜〜〜〜い！　船を出してもらえるそうですよ〜〜！」

「おおっ、それはナイスですねぇ〜。グッジョブですよ〜ポップ」

その聞きなれた声に男――アバンが振り返る。大きく手を振りながらこちらへと駆け寄って来るのはトレードマークのバンダナを巻いた黒髪の少年――ポップの姿。
数少ないアバンの弟子の一人であり、未来の大魔法使いを自称している少年である。
もっとも、家出同然、事後承諾による押し駆け弟子でもあったが。

「ゼェゼェ……な、なんすスか……、その、グッ、じょぶって……」

「グッドジョブ、つまりは良い仕事という事ですよ」

よほど急いでいたのかゼェゼェと荒い息をつく弟子の姿に、明日からの授業は体力向上をメインにしようと誓うアバン。

（とはいえ、まあ……無理でしょうねぇ……）

訓練メニュー其の一で音を上げるポップの姿を想像し、その誓いを直ぐに撤回する。
同年代の少年達に比べてもポップの魔法使いとしての資質が十分にある事はアバン自身認めてはいる。

弟子となって数カ月ではあるが、既に魔法使いとしての初級の呪文をほぼ全て修めている事がそれを証明していた。
しかし、どうにもこうにも根性が無いというか堪え性が無いというか注意力散漫というか。
その成長を褒めた事が災いしたのか、生来の性格的な面か、そこからなかなか次のステップへと進もうとはしない。
何かと理由を付けては厳しくなる修行を避けようとするのだ。
ガツンと厳しく当たればよいのであろうが、ポップ自身が魔法使いとして成長するという事にそこまで必死になっている訳でもなく、アバンにもポップを急いで成長させる様な理由は無い。

（結局は本人のやる気の問題ですしねぇ）

「ハァ……ハァ……、と、とにかくですね、パプニカへの船は……出せる。……でも、もう直ぐに出港するって……ゼェ」

「とりあえずですね、深呼吸して落ち着きなさいポップ。船の件は分りました。ああ、彼はどうすると言っていましたか？」

「……フゥ……ハァ……。ああ、あいつなら『パプニカには鬼がいるから寄りたくない』って言ってロモス行きの船に乗っちまいましたよ」

あいつとは、旅の道中で出会ったとある青年の事である。師であるアバンと意気投合したのか、一月ほどであったが共に旅をしていた人物である。
腕が立つのは認めるが男としてあいつを認めるわけにはいかない、乗り越えるべき壁だというのがポップの認識であった。
鼻の下が伸びている辺り、その燃やしている対抗心はロクな事ではなさそうであったが。

「ふむ。ならば私達も急ぎましょうか」

うへへへへと怪しく笑いだす弟子の姿をなるべく見ない様にしてそう言うと、アバンはポップの身体をひょいっと小脇に抱えてみせる。

「はへ？」

「時間は有限ですからね。タイムイズマネー、急ぎますよ～」

何を、とポップが抗議の声を上げる間もなく、アバンは凄まじい速さで駆け出した。

「ちょちょちょ、せ、せんせ～～～～～～っ！？」

砂塵を巻き上げて爆走するアバン。

ポップの抗議は右から左。

「ちょ、うわっ！？　あぶ、あぶ、あぶぶぶ！！」

砂塵によって奪われた視界、時折り頬を掠める砂利や道行く人の叫び声。

何より恐ろしいのは地面と水平になっている自分の身体に揺れや振動を感じないという事。

「死ぬ死ぬ死ぬ死ぬしんでしまう～～～～～～ッッ！！」

涙と鼻水を撒き散らすその姿を砂塵が覆い隠してくれていた事は、ポップにとってある意味幸運であった。

「……何やってんだあの二人……」

桟橋からロモス行きの船に乗り込もうとしていた件の青年は、目の前を駆け抜けた砂塵を呆れたように見つめていた。

ちなみにパプニカ行きの船が待つ桟橋を通り過ぎている。

「パプニカに行くんじゃなかったのか？　いや、気付いてないのか？」

伝えるべきかと思案しようとして――

「おい、兄ちゃんよ、乗るなら早く乗ってくれ！」

「ん？　ああ、悪い。直ぐに乗るよ」

船員の少しイラついた声に、まあいいかと二人の事は気にしない事にした。

「よ～しっ！　それじゃあ出港するぞーーーー！！」

地上界の中心に位置するギルドメイン大陸。

地上最大の大陸であるその地には、貿易大国であるベンガーナ王国、世界最強と称される騎士団を擁するカール王国、城砦王国と呼ばれるリンガイア王国など、世界有数の大国が存在している。

まさしく世界の中心たる大陸である。

そのギルドメイン大陸南端の半島に、アルキード王国という国が存在していた。
国力という点においては先の三国に劣るものの、他の諸外国と比較すれば、十分に大国と呼ばれるだけの力を持った国家である。
だが、それも全ては過去の話。
甲板に立った青年は、手すりにもたれかかりながらその視線をある方向へと向けた。
今、この世界にアルキードという名の国は存在していない。

時は十数年遡る。
魔王ハドラーと名乗った魔族が、闇の軍勢を率いて地上世界の征服を掲げて全世界に対し宣戦を布告。
地上界南東に位置するホルキア大陸に自らの居城である地底魔城を構え、宣戦と同時に地上侵攻作戦を開始した。
エルフやドワーフ、ホビットや土着の魔物など、聖邪善悪を問わず地上に生きる者全てを否応なく巻き込みながら、その戦火は加速度的に広がりをみせる。
『国境沿いの山村に魔王軍の襲撃あり』
各国がそうであるように、ここアルキード王国でも日に日に勢いを増す魔王軍への対応に追われ、城内は慢性的な人手不足に陥って

いた。
この日、兵からの報告を受けて対応に向かったのは既に一線を退き今では王の相談役として城に招かれていた老魔法使いブライ。
彼が動かせる僅かばかりの手勢を率いてようやくその場所へと到着した時、全ては焼け落ち灰と化した後であった。

「……生存者の存在は絶望的、か」

立ち上る煙、灰の中でくすぶる炎。直前まで村であった廃墟を眺めながらブライが苦々しくもそう呟いた時、ひどく慌てた様子の兵士から思わぬ報告が入る。

「ブライ様！　子供です！　民家の地下室から生き延びた子供が！！」

「な、なんじゃと！？」

魔王軍との戦いの中、多くの人々が大切な何かを奪われていたこの時代。今また家族を、友人を、思い出の全てを奪われた存在が生まれ続けている。
兵士が連れてきたのは、灰に塗れた子供であった。まるで感情を失くしたかのように表情を固まらせた幼い少年。

「……立ち向かったのでしょうな。扉の前にその子の両親と思わ――」

「――言わずともよい。して、この少年の他には？」

絶望視していた生存者の存在は希望だ。ならば他にもと一縷の望みをかけて問うたブライであったが

「いえ……恐らくは……」

「そうか」

うつむき答える兵士の言葉に、老いた今の自分の無力さを痛感する。

平和の中、老いを受け入れ自らの力を高める事よりも政の道を選んだ。その事を間違っていたとは思わない。

思わないが、それでも、あるいはと。そう思ってしまうのは己の未熟故か。

「ままらなんものじゃな」

そう呟くと、ブライは無言のまま立ち尽くしている少年を見た。

少年が何を思い故郷を、滅ぼされた村を見つめているのかはブライにはわからない。

珍しい光景ではない。

少年の見つめる光景は珍しいものではない。

魔王ある限り、世界では今まさにこれと同じ光景が、悲劇が繰り返されている。

こうして命があるだけでも少年は幸運であったと言えよう。

「じゃが、生きてさえいれば、で済ませるわけにもいかんな」

少年のその瞳に、怒りや悲しみよりも遥かに大きな憎悪の色を感じ取ったブライは、せめてその道を誤らぬようにと、静かに少年の硬く握られた手を取った。

そして数年後。
ブライに引き取られてからの少年は恵まれていたと言える。
新しい家族が、新しい友がいる。
年相応の明るさと活発さを取り戻した少年は、ブライに師事をして魔法使いとなるべく修行を始めていた。

「爺さん以上の魔法使いになる」

照れ臭そうにそう言った少年であったが、ブライは少年が自分に隠れて独自に体術や剣術の修行も行っている事に気付いていた。
未だ消えぬ魔王への憎悪が故に、少年が力を求めている事を知っていた。
強くなる事に異論はない。だからといって魔法も体術も幼い子供が片手間で習得できるような容易なものではない。
そこでブライは少年が肉体的な鍛錬に耐えられる身体に成長するまでは知識の習得を優先させる事にした。
幸いにもブライの知人にはその方面に長ける者がいる。古い友人の住むテラン王国へと向かわせる事とした。

テラン王国――ギルドメイン大陸にある、森と湖の国。
徹底した平和主義。時代の流れに逆らうかのように自然主義の思想を掲げ、そして衰退していった。
今では人口僅か五十人程となってしまったもはや名ばかりの小国である。
竜の神という諸国とは異なった信仰を持ち、名産になる物も無ければ、他国の人間があえて観光に訪れるような名所も無い。
定期的に訪れる商人以外は、外から来る者など滅多にいない。

まるで隠れ里のような雰囲気を持った寂れ行く静かな国。それがテラン王国であった。

しかし、テラン国王の知識と彼の蔵書は、この世界に並ぶものはないとされている。

変わり映えなく繰り返される穏やかな日々。それは戦う力を求める少年にとっては苦痛の日々であったが、それを打ち破ってまで無茶をする事もできなかった。

少年を迎え入れた祖母的な存在と妹分の圧力に屈したとも言う。

しかし、その変わり無き日々もテラン王より書庫の閲覧を許された日から一変する。

智に魅せられたのだ。

少年は日々の多くを書庫の中で過ごすようになった。

ほんの暇つぶしのつもりが、いつしかそれが目的となり。

食事も睡眠時間も滅茶苦茶になっていると、友人からの報を聞き、別の方向へ無茶を始めた息子にどうしたものかと頭を悩ませたブライであったが、その心配は杞憂に終わる事となる。

それは、ある一つの報が全世界を駆け巡ったためであった。

――勇者、魔王ハドラーを討つ。

少年の運命を変えた、七年にも及んだ戦乱の終結。

失われた復讐の機会、テランで得た新たな家族とも呼べる存在、月日の流れ、それらの全てが少年を変えていった。

成長した少年は、テラン王よりの推薦状を得て何を思ったのか僧侶となる修行を積むべくホルキア大陸にあるパプニカ王国へ旅立と

うとしていた。
戦乱後、魔王の支配下にあった多くの魔物が、邪悪な呪縛を解かれて人前から姿を消したとはいえ、元々地上に生息していた魔物までもが姿を消したわけではない。
魔王の脅威は失われても、生来の凶暴さを持つ魔物は人々の脅威として存在している。
故に魔王の存在が無くとも力を得る事は無駄にはならない。
少年からそれを聞かされた時、祖母ともいえるナバラはその事に首を傾げ、まだ幼い妹分のメルルは良く分っていないのかナバラの真似をして首を傾げていた。

「まあ、こんな時代だ。強くなって損は無いだろうが……。魔法使いから僧侶、そしてパプニカ。アンタ賢者にでもなろうってのかい？」

「賢者なんて大層なものになる気は無いし、なれないよ。ただ、さ。便利でしょ？」

「どっちも中途半端にならなきゃいいんだけどね。……アンタの人生だ、好きにやりな」

そうしてパプニカへの旅立ちを翌日に控えたある日の早朝。
復讐という目的を失ったとしても、習慣と化した鍛錬は早々止められるものではなく。
テランの森、その奥深くで日課の鍛錬を終えた少年がいつものように木の実や山菜を採って家へと帰ろうとしたその時であった。

「ん？」

背後に感じる気配に少年はその足を止めた。
手に持った籠をそっと置くと、いつでも呪文を放てるように精神を集中させて油断なく振り向く。

「何者だ」

ただでさえ人の少ないテランである。知人の気配ぐらいは分るし、用があるなら向こうから声をかけて来るだろう。

「……出て来い。警告は二度までだ。三度もするつもりはない」

果たして、木々の間から二人の男女がゆっくりと姿を現した。

「そこで止まれ。おかしな動きは見せるな」

鎧を纏いその背に竜を模した剣を差した男と、その男に肩を支えられ目深なフードを被った女性であった。
男は背の剣に手を伸ばそうとしたが、隣の女性がその手に触れて何事かを呟くとその緊張を僅かに緩める。
互いに身を寄せ合ったその姿に、少年の脳裏にふと今は亡き両親の姿が思い浮かぶ。
途端に緊張が失せる。拍子抜けした、と言ってもいいのかもしれない。

「……向こうに空き家がある。とりあえず、休むぐらいは出来る」

構えを解き、そう言って地面に置いた籠を手に取った少年は、二人に背を向けて森の奥へと向かい歩きだした。

その行動眉をひそめた男だったが、傍らの女性が頷くのを見ると、剣に伸ばしたその手を戻し、女性と寄り添いながら少年の後に続き森の奥へと進んで行った。

互いに無言で歩く事しばらく。

そうして進んだ先。少し開けた森の中には確かに一軒の小さな小屋があった。

「……すまない」

ここに至ってようやく警戒と緊張を解いたのか。

男の感謝の言葉に少年はひらひらと手を振る事で答えると、扉を開いて二人を小屋の中へと招き入れた。

相手が“ただの道に迷った旅人”であれば、家族の待つ家に連れて行くところであったが、少年が二人をここへと案内したのは理由がある。

疲労の所為か少年の記憶にある姿よりもやつれて見えたが、女性の姿がとある人物に似ていたためだ。

直接言葉を交わした事はないが、ブライに連れられた先で何度か目にした事がある。

本人かどうかは分らないが、何にせよ訳有りであろう事は見てとれた。

明日にはパプニカへ、というこのタイミングで厄介事には関わりたく無かったというのもある。

――ここはさ、一年以上前か。ベンガーナやアルキードでの暮らしに憧れて出て行った人の家。まあ、家というより小屋だけど

簡素なベッドであったが、放浪の身であった自分達には十分。
愛する妻を休ませると、緊張に満ちた長旅の疲れが一気に襲い掛かったのか。
男は椅子に深く腰掛けると、何をするでもなく、ただ呆然と天井を見詰めていた。
戦うために生まれた男にとって、たかが追手如き何人向かってこようが物の数では無かったが“何かを守りながら”という行為がこれ程までに自身に疲労を強いていたとは思いもしなかった。
その事実が歯がゆくもあったが、不思議と悪い気はしなかった。

――好きに使ってくれって言ってたからさ、別にここに住んでも文句は言われない

そうして暫く。
自分が眠っていた事に気付いた彼は、慌てて立ち上がると急ぎ辺りを見回した。
追手がかかる可能性が常にある以上、迂闊に気を許すわけにはいかなかったのだ。
周囲の気配を探り、ベッドの上で穏やかに寝息を立てる妻の姿を見て落ち着きを取り戻すと、「ああ、そうか」と呟き再び椅子に腰を下ろした。
まどろみかける意識の中で、彼は先程出会った少年の事を思い出していた。

――おれも時々使っていたからね。シーツを置いていたのは偶々だったんだけど

脇にあるテーブルを見れば、そこには中身の入った籠。干し肉や干物などの食料、薬草らしき医療品が置かれていた。

――ここを出て少し行くと川がある。北に行くとテランだ。何も無いトコだけど人手位はある。まあ、爺ちゃん婆ちゃんばかりだけどな

いくら疲れがあったとはいえ、人が訪れていた事に気付けなかったという事実は、戦場に生きた彼にとって看過出来る事ではなかったが。

――おれは明日にもこの国を離れる。パプニカに行くんだ。僧侶になるって言ったら婆さんには首を傾げられた

――多分もう会う事もないと思うから、気にしなくてもいい。お互い名乗らなくてもいいか

そう言って出て行ったはずの少年の心遣いに、思わず笑みを浮かべてしまう。

結局、そのまま流されるようにお互い名乗ることも無かったが、縁があればまた出会うことがあるのだろうか。

静かに眠る妻の元へ向かった彼は、愛おしげにその頬に触れると、表情を穏やかなものに変えて呟いた。

「ここから始めよう、ソアラ。やがて生まれる子と共に、この地で穏やかに暮らそう」

少年がパプニカ王国へと赴き一年程が過ぎようとした頃、ナバラから一通の手紙が届いた。

それは、旅先の少年の身を案ずる当たり障りの無い内容だったが、

ナバラはその道では高名な占い師である。
そんな彼女がこの一年出した事の無い手紙を出した。
ブライとも暫く会っていなかった事を思い出し、これも良い機会かと、少年はパプニカ王の許しを得て故郷への帰路に就いた。
本来はアルキード王国への直行便に乗りたかったのだが、渡航規制が発せられたとの事で、隣国のベンガーナ行きの便に乗り少し遠回りする事になった。
ベンガーナ王国はアルキード王国と同じ半島の北側に位置する国であり、ナバラの待つテラン王国の隣国でもある。
ブライかナバラ、どちらから向かうかとの考えが纏まらぬまま、ベンガーナの港に着いた少年は、そこで気になる話を耳にする。
――魔物に王女を奪われたアルキード王が見事魔物を捕え、公開処刑を行う

少年の脳裏に浮かぶのは、あの森で出会った二人の姿。
馬鹿な、と少年は思った。
互いに寄り添う二人の姿は、一年経った今でもはっきりと思い出せる。
間違いであれと、少年はアルキード王国へと急いだ。
今更少年が行ったところで何ができるとも思えないが、ブライであれば、王の相談役でもあったブライであればきっと何とかしてくれると。

それは、一瞬の出来事であった。
駆ける少年の視界の先に、ようやくアルキードの城門が見えたその時――

眩い閃光が視界を焼く。
轟音が鼓膜を破る。
爆風が少年の身を包み込み、その身体を遥か上空へと吹き飛ばしていた。
大地に叩きつけられ、全身を襲う痛みによって意識を失う事もできず。
迫り来る死の予感と恐怖に泣き叫びそうになるが、動かぬ身体ではうめき声一つ上げる事すらできない。

（死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない嫌だ嫌だいやだいやだい……）

死を拒絶しながらも、暗転する意識に苦痛からの解放を感じる取る少年。
その甘い誘惑は甘美で抗いがたく。
それでも――抗った。
それは、何も分からず知らず、理不尽に死を迎える事への怒りであり、一瞬とはいえ苦痛からの解放を願い、死を受け入れようとした自分への怒り。
それは、意地。両親から託された命。自分の命の価値という目に見えぬモノに対しての誇りからくる意地。
少年の心は、ただひたすらに迫りくる死に抗い続けた。

どれほどの時間が過ぎたのか、それとも一瞬でしかなかったのか。
暗闇の中であがき続ける少年に、一筋の光が差し込む。
その光を掴もうと手を伸ばし――
いつしか少年の視界には、太陽に向けて伸ばされた自分の腕が映

っていた。

全身に感じる痛みは耐えられない程ではなく、ゆっくりと起き上った少年は、目も耳も、自分の五感が回復している事を確認すると、覚えたての回復呪文を唱えて傷を癒した。

あれはいったい何だったのか。

暫く身体の状態を確認していた少年であったが、風に吹かれて薄れ始めた砂塵の向こうから覗いた光景には、咄嗟に言葉を失った。

「地面が……アルキードが……大地が……消えた？」

その呟きの向こう。

先程まで人々の営みがあった、町が、城が、大地が。

その場所は、今は轟音と共に渦巻く巨大な入り江と化していた。

少年はただ呆然と、何が起こったのか理解できぬまま、その場でただ立ち尽くす事しかできなかった。

全てを無くしたあの幼き日のように。

ゆっくりと視線だけを動かす。

そこには

ナニかを抱え

飛び去る

何者かの

ひどく小さな背中が見えた

――アルキード王国消滅。

この報は瞬く間に世界中に広まったが、誰にもその原因を突き止める事はできず、様々な憶測だけが飛び交う事となる。

魔王の呪い、禁呪を行使して失敗した、新たな魔王が現れた。

復興の兆しも見え始め、人々がようやく以前の平和な生活を取り戻そうとした矢先の出来事であった。

この日、世界からアルキードと呼ばれた国が消えた。

その強大な暗黒の力によって、この地上を支配せんと企んだ魔王ハドラーが、勇者とその仲間達に倒されてから十数年。

未だ各地にはその傷跡を残しつつも、人々はようやく手にした平和な時間の中で、逞しく日々の生活を営んでいた。

世界四大陸の一つであり、地上界南西部を占めるラインリバー大陸。

その地にあるここロモス王国も、今では戦火から立ち直りかつての賑わいを取り戻しつつあった。

「だ〜か〜ら〜、この際多少手強くてもいいからね？　もうちょっと金になるのはないの？」

そう言ってカウンターに詰め寄るのは、僧侶が纏う法衣をだらしなく着崩した青年である。

アバン達と別れ、一人ロモスへと向かった青年であった。

腰まで伸ばされた長い黒髪は首の後ろで一つに束ねられ、腰には細身の剣を差している。

それなりの体格の良さも相まって、一見すると戦士のようにも見えるが、青年は自分を僧侶だと主張する。

洗礼を受け、僧侶の呪文を取得しているので決して嘘ではない。

嘘ではないのだが、青年の人柄や戦い方を知る者は口を揃えてこう言う。

――嘘くせえ、と。僧侶なめんな、と。

「あのなアウダー、ここはどこだ？　ロモスだぞ？　そんなに金になるモンスターを探したけりゃあ、迷いの森か他の国にでも行け。オーザムとかリンガイアなんて稼ぎどころじゃねえか？」

「ふざけるのは髪型だけにしとけよオッサン。大陸を越えられるような、そんな路銀があったらね、誰が好き好んでオッサンの顔を見に来ますか」

青年の名はアウダー。

立ち寄った街や村で、ちょっとした仕事をこなしながら、ふらふらと旅を続ける二十一歳の自称冒険者である。

魔王の脅威が去った後でも、元々地上に生息していた魔物の中に

は、その生来の気質からか、魔王の呪縛とは関係なく人を襲う魔物がいる。
そういった中で、凶暴な魔物の退治や、平和になった事で再び現れ始めた山賊、海賊などの討伐、行商人の護衛や宝探しなどの荒事を生業とする冒険者という存在が、再び脚光を浴びるようになっていた。
魔王の引き起こした戦乱は、各国の軍事力を大きく削ぎ落し、かつてのように自国の兵のみで国内の治安を守る事が困難になったのも一因である。
ここ“ルイーダの酒場”と同じく、魔王の戦乱の終結した後は、酒場や宿屋の多くはこうした冒険者への仕事の斡旋場としての役割を再開していた。

「なんだと！　この斬新な“アフロヘヤースタイル”を馬鹿にするのか！　これはベンガーナ王国で今最もナウいファッションなんだぞ！」

そう言って、カウンターから身を乗り出し、顔を真っ赤にして唾を飛ばしながら力説する主人。
そのあまりの勢いに眉を顰めながら、「誰に聞いたの」と呆れながら尋ねたアウダーに返ってきたのは、ある意味で想定の範囲内。

「黒縁の眼鏡をかけて、髪の毛がこうクルクルとした兄さんだ！」

「あ～、うん。やっぱりね。何と言うか、ゴメン。何も言えない」

懐から取り出したハンカチで、飛ばされた唾を拭きながら、アウダーは相変わらずムチャクチャ言うなと、心当たりの人物を思い浮かべていた。

アバン・デ・ジュニアール三世。
自称勇者の家庭教師、という変人である。変態ではなく、変な人という意味での正しく変人。いや、これもまたある意味で変態かもしれないが。
アウダーとは、出会った先で何度か一緒に仕事をした仲ではあるが「どういう人物か？」と問われれば、そうとしか言いようが無い。
確か、今は弟子のポップと一緒にパプニカへ渡ったと思っていたが。
あの後、結局船に乗れずにロモスに来ていたのだろうか。

「ま、可哀想なオッサンはおいといて。今日はルイーダちゃん居ないの？　俺、あの娘がいるからここを利用してるのよ？　オッサン、いいから隠してないで出しなさい」

「お嬢はお城に定期報告。残念だが今日一日は戻らねえよ。つーか、オッサンを連呼するんじゃねえ！」

まったく、どいつもこいつもルイーダ、ルイーダと言いやがって、とぼやきながら不貞腐れる主人。
諸国に比べて、魔物の被害という意味では比較的安全な部類に入るロモスには、冒険者に向いた仕事というのはあまり多くはない。
つまりは平和であるのだが、それはソレ、これはコレ。
そんな中で、ここルイーダの酒場が繁盛しているのは、王国直轄の斡旋場である事と、客の大半が酒場の名前にもなっている女性、ルイーダ目当てなのが大きい。

「なんだ、今日はハズレの日？　んじゃもういいや。オッサン、一番安い酒頂戴。もうね、今日は飲んで寝るよ。お兄さんは頑張った」

「大概失礼な奴だなお前は。頑張ったって、まだ何もしてねえだろ

うが」

昼間ッから何言ってやがる、とその言葉に苦笑しながらも、注文よりも少しだけ良い酒を出そうとする主人。

何だかんだ言ってはいるが、請けた仕事はちゃんとこなすし依頼人からの評判もなかなか良いアウダーは主人にとって手放し難い大事な客だった。

「オッサンに若さを吸い取られないように頑張ったんだよ？」

やっぱりどうでもいいか、こんな奴。

さりげなく記帳した代金を上げる主人。

酒のランクも落とす。

ちなみにツケである。

渡されたグラスを手にしたアウダーは、ぼんやりとグラスを眺めていると、そこに映った絵が気になり、背後の壁に張られた手配書に目を向けた。

「オッサン、何あの張り紙。新しい手配書？」

凶悪な魔物や犯罪者などが描かれた紙の貼られた看板に、一際目立つ物があった。

翼の生えたスライムが描かれたその紙は、日に焼けた跡もなく歪みも少ない事から、比較的新しい物だという事が分かる。

「ああ、ゴールデンメタルスライムだとさ。デルムリン島って知ってるか？　どうやらあの怪物島に居るらしいんだよ。どこかの好事家が欲しがっているらしくてな。デルムリン島って事が嘘くさいんだがよ。一体誰が確かめたんだ、ってな。まあ、それでもだ、あそ

こなら何が居てもおかしくないってのが微妙だよな」

「一、十、百……百万ゴールド！？　ありえないでしょ、ナニコレ？　どこの馬鹿野郎？　コイツのイタズラじゃないの？」

あまりに馬鹿げた金額に、アウダーは思わず口にした酒を噴出しそうになる。

ちなみに、その横に『いたずら注意』と書かれた小憎たらしい表情の大ねずみの手配書もあったが、その金額は十ゴールドである。

「依頼主は確かだよ。ゴールドだってちゃんと払えるぐらいのな。まあ、それだけ希少だって事なんだろう」

金を持っている奴は持ってるんだよ、そう言う主人には哀愁が漂っていた。

「デルムリン島にねえ。あの近くまでだったら、この間行ったけどね。そんな珍しいスライムが居るなら、あの時漁師さん連中に無理言ってでも上陸させてもらえばよかったか？」

先日、アウダーは近くの港町に住む漁師から、漁の邪魔をする海の魔物“マーマン”を退治して欲しいとの依頼を受けて、デルムリン島近くの沖合まで行っている。

件のマーマンであるが、仲間を引き連れて現れたので、とりあえずリーダー格とおぼしき一匹に少し派手な一撃を与えると、涙目になってさっさと逃げ出してしまった。

まるで弱い者いじめのようで、どうにも居た堪れなくなったアウダーは、魔物に怯えて待っていた漁師達に、島に近づかなければ大丈夫と報告した。

世界のどこかにあるという、心優しき魔物達の最後の楽園。

誰もが魔物を恐れ、信じようとはしないその噂の場所は、案外デルムリン島なのかもしれないと、その時の光景を思い出しながら、アウダーはグラスを口にした。

特に急ぎの予定もなかったアウダーは、そのまま主人と雑談を続けていた。

やれ、あの店のサービスはどうだの、道具屋の看板娘さんが最近化粧を覚えたのはどうだのと。

「馬っ鹿、オメ、あの尻が良いんだろうが、尻が」

「だからオッサンなんだよオッサンは。分かってないなオッサンは。尻とか胸とかはいいんだ。愛だよ愛。あとは性格と顔とプロポーション」

「だから！　オッサンを連呼すんじゃねえ！　結局全部じゃねえか！　ふざけんなこのヤロウ！！」

「ナメンナよ？　巨乳だろうが貧乳だろうが問わないぜ？」

女性についてどうこう言う前に、自分達をなんとかしろとはこの時酒場にいた客達の共通の見解であったが誰も口にはしない。

いい感じにぐだぐだになり始めた二人はなおも止まらない。いつもであればこのあたりでルイーダの鉄拳が唸るのだが生憎不在。

やがて互いの生活態度に話が向かい、アウダーがかなりの数の魔物討伐を行っている事に、仮にも神に仕える僧侶様がそんな好戦的でいいのか、と主人が問えば「それはそれ、これはこれ。今の世の中、人間生活していくにはお金は大事よ」と、これまた聖職者にあ

るまじき俗っぽい答えを返す。

（（謝れ！　世界中で一生懸命頑張っている僧侶たちに謝れ！！））

店内の客たちの心が一つになったが、馬鹿二人には届かない。

そりゃあそうだ、と馬鹿二人で笑いあっていると、

「あなた、デルムリン島に行った事があるのなら、私達を手伝ってくれる気はないかしら？」

背後からのどこか媚びるような艶を含んだその声に、アウダーが振り返った先には四人の男女の姿があった。

グラスを持った女僧侶と、小柄な老魔法使い、巨漢の戦士と目つきの鋭い男である。

「船は手配できたんだが、案内人がいなくてね。できれば手伝ってもらえるとありがたい。もちろん報酬は払う」

眼つきの鋭い男の言葉に、盗み聞きとは趣味が悪いな、と思ったアウダーであったが、懐が寂しいのは事実。

報酬の部分を強調されたのは、金さえ積めばと思われているようで、釈然としなかったが、

（案内するだけで構わないのなら暇つぶしにもなるか）

そう考えていると、興奮した様子の主人がアウダーに詰め寄りまくし立てるように話し出した。

「おい、ありゃあ、最近噂になっている勇者様御一行だぞ。凄いじ

ゃねえかアウダー。勇者様直々のご氏名を貰えるなんてよ！」

別に道案内が出来れば誰でも良かったんだろ、と思いはしたが、主人のアレなはしゃぎっぷりに黙っておく事に。

（それにしても、またえらく嫌な感じのする勇者様だことで）

勇者という言葉で、アウダーの脳裏に年甲斐もなくVサインをするあの変人さんの姿が浮かんだが、頭を振って掻き消す。

そうこうしている内に、主人と勇者様との間で、アウダーが御一行の案内をする事が決定してしまっていた。

「ほう、お前さんがあのアウダーか。なかなかに評判の良い冒険者らしいの」

老魔法使いの人を値踏みするような目線に少し腹が立ったアウダーだが、俺は大人、俺は大人と自制する。

「勇者などと大それた者でもないが。さて、私の名前はでろりん。彼女はずるぼん、そこにいる魔法使いがまぞっほ。そして彼がへろへろだ」

その丁寧で礼儀正しい姿勢に胡散臭さも感じはしたが、「よろしく頼む」と、でろりんから差し出された右手をいつまでも放っておくわけにもいかず。

急ぎの仕事もないし主人の顔を立ててやるかと、アウダーはその手を取った。

「アウダーだ。ま、短い付き合いになるだろうけどな。よろしく頼むわ、勇者様」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8664y/

ドラゴンクエスト～勇者達の物語～

2011年11月25日23時49分発行